

「幸せへのチャンス」

～良い決断～

ヨシュア 2章1～21

争いで平和を得ない決断をしたデンマーク

北欧の国、デンマークは世界で一番国民が幸せな国と言われています。GDPは世界で37位（日本は3位）ですが、国民一人あたりのGDPは世界で8位（日本は26位）で日本よりもずっと上です。授業料は大学まで無料、医療費も永年無料、グリーンランドなどに埋蔵資源が豊富にあります。国としてはお金持ちではないけれど、国民一人ひとりはとても豊かに生活しています。なぜこのように豊かになったのでしょうか。デンマークはフランスとドイツの間にある小国です。歴史的に何度も戦争を経験し、そのほとんどで負けてきました。国土は衰退し、国民も疲弊していく、そのような経験を繰り返した国です。第2次世界対戦ではドイツ軍に攻撃され、その日のうちに全面降伏しました。デンマーク国王（クリスチャン10世）は争いによって平和な生活を守ることを選ばなかったのです。今まで何度も戦争を経験し、そのたびに負けて衰退していく歴史でした。これ以上負けたらもう駄目だという状態になっていました。デンマークの人々は艱難を知っていたのです。だから攻撃してくるドイツ軍に対して、戦わないで降伏する決断をしたのです。デンマークにも沢山のユダヤ人が住んでいました。ドイツやポーランドでは90%以上のユダヤ人が殺害されましたが、デンマークでは90%以上が生き残ることができました。ナチスドイツはユダヤ人を他の民族と区別するために胸にダビデの星のマークをつけることを強要しました。しかしデンマーク国王は「わたしはこの国に住む者はみな家族だと思っている。彼らに星をつけるなら私達も星をつける。」と言ってその命令に従いませんでした。デンマークはドイツに無条件降伏したことで、自治権を許されていました。戦っていたらデンマーク人もポーランド人のように殺されていたかもしれません。しかし彼らは「闘いによって平和を得ない」という決断をしました。この決断の上にデンマークの今日があります。

ラハブの決断

エリコの街にラハブという女性がいました。彼女はイスラエルにとっては敵国の女性でした。そして、エリコにいる沢山の群衆の中でただ一人、神の前に良い決断をした人でした。イスラエルの人々が荒野を旅している間、たくさんの情報がエリコの人々にも伝わっていました。イスラエル人をエジプトから連れ出すために紅海を真っ二つに裂いて乾いた大地を渡らせた神の話、荒野を旅するときも天からの食べ物や水を毎日与えられた神の話、荒野で戦ったイスラエル人を助けた神の話、そのイスラエル人が来るかもしれないと聞いて、エリコの人たちの多くはやる気を失い、恐れ、気力を失っていました。ところがラハブはそうではありませんでした。大群衆のエリコの街の中で、自分と家族が正しく生きる方法を決断したのです。イスラエルの斥候がエリコの偵察に来た時、ラハブは彼らを助ける事を選びました。そして、彼らが攻めるときには自分と家族を救うようにと約束をしたのです。この決断がラハブとその家族の将来を変えました。今までは城壁の中で自分たちの生活を守るためにだけに生きていました。高い壁を築き、守りを固めることで安心しようとしていました。自分を守ることをだけを考えていたのです。他者を思いやる事をしない、自己中心な生き方でした。そんな中で、エジプトを出て荒野を旅している民の話を聞いたのです。天幕で暮らし、家畜といっしょに遊牧生活をする民。それは今までとは全く違う価値観でした。ラハブは新しい価値観と出会い、イスラエルを導く神が本当の神だと感じたのです。

①神様を感じる

遊女ラハブは良く理解できていなかったけれど、イスラエルを導いている神様を感じました。物事をひねくれた目で見たり、恐れから見たりするのではなく、まっすぐに感じていました。私達日本人は感じなくなっています。先日の「家族で絆」というイベントで、生きた鶏を解体してカレーを作りました。沢山の子供も参加していて、ほとんどの子供が、鶏が死んでいくところを見ました。でもそれを見ている子ども達の反応はとても覚めたものでした。さっきまで自分たちが可愛いと言って触っていた鶏が目の前で死んでも、その肉を食べるときに何も感じないのです。私たちは神様に目を向けていなければいけません。感じなければならぬのです。感じなくなってしまうと正しい決断ができなくなるからです。羊は羊飼いの声を知っています。本物が偽物か、感じて気づかなければなりません。間違っただけで導く声か、正しい方に導く声かしっかりと聞けばわかるはずですよ。

②プライドを捨てる

プライドはすべての悪の枢軸です。プライドを持ったままでは

神の国に入ることはできません。「人は新しく生まれなければ神の国を見ることはできません。」(ヨハネ3:3)とニコデモはイエス様から言われました。彼はユダヤの議員であり政治家であり学者でした。イスラエルの中心にいるというプライドがありました。でもニコデモは少しだけ神を感じていたもので、暗い夜になると人々に見られないようにこっそりとイエス様のもとにやってきました。そこで「新しく生まれなければ・・・」というイエス様の言葉に、学者としてのプライドが反応してしまい「もう一度母の胎に入ることができましようか・・・」と、ひねくれた反応をしてしまいました。ラハブは素直に神様を感じて信じ、イスラエルがエリコに攻めてくるときには自分と家族を救ってくださいと願いました。もしラハブがエリコで豊かな人で世間体があったなら、こんなに素直に神様を受け入れることはできなかったでしょう。しかし彼女のプライドはすでにズタズタになっており世間体もありませんでした。プライドは自己防衛のためにあります。プライドが常識という概念を作り上げますが、常識は人によってみな違います。神様はわざわざ私達を違うようにお作りになりました。でも私達は人と違うことに劣等感を持つようになったので、プライドで守らなければ鳴らなくなりました。プライドは私たちに服を着せて、その服装や外見を見るようにさせます。姿、容姿を見て人を判断するのです。しかし「人はうわべを見るが、神は心を見る。」(1サムエル16:7)と聖書にあります。私たちは心を育てないといけません。アダムとイブが罪を犯し人は呪われた存在となりました。やがて人はバベルの塔を築こうとします。バベルとは人のエゴであり虚栄です。人よりも上になりたいと言う思いです。そのような私達の価値観にアブラハムは終止符を打ちます。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、私が示す地へ行きなさい。」(創世記12:1)という神の言葉に従ったアブラハムに神は一人息子のイサクを犠牲として捧げるように言いました。アブラハムが神様に従って愛する我が子に手をかけようとした時、「あなたの手を、その子にくださいてはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。」(創世記22:12)と言われます。「わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。・・・あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受ける・・・」(創世記22:17, 18)だからユダヤ人を祝福したデンマークは今日これほど栄えたのです。先人が苦闘し苦難の中で決断してきた上に今日の繁栄があるのです。

③決断と実行

神様を感じてプライドを捨てて決断したのなら、実行しなければなりません。私たちはすぐに変わるわけではありません。でも神様がご覧になっているのは昨日よりも今日、今日より明日と私達が成長していく姿です。人はな20年もかけておとなになるのでしょうか。心を育てるためには時間がかかるからです。20年かかっても正しく成長していないこともあります。だから私たちは決断して正しい価値観を継承していかなければならないのです。今の私達のルールではアダムとイブの価値観が継承されるだけです。しかしラハブのように決断して人生を変えることができたら、パラダイムシフトできたなら価値観が変えられます。このような決断をすることは将来を幸せに生きるチャンスです。しかし、それを見出すのは難しいことです。素直になれば簡単だが、群衆の中の一人では絶対にできません。「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。」(マタイ7:13)神様は狭い門を用意しておられます。ひざまずいて遜らないとその門には入れません。大勢が大きな門に向かっていてる中で、一人だけ小さな門に向かって行く勇気と決断が必要です。真実は静けさの中で、隠れたところで、私達が静まって聞かないと感じられません。神様は救い主を馬小屋で誕生させるという方法を選びました。人々が見下し、けなし、否定する。そのような汚い汚れたところにイエス・キリストは生まれました。多くの人が馬小屋で生まれたイエスを否定しました。自分たちの価値観と違っていたからです。「家を建てる者達の捨てた石。それが礎の石になった。」(詩篇118:22)苦しみに合うことは幸いです。私達をプライドから解いてくれるからです。痛みの中を通るとき、私たちは心を変えることができます。痛みの中で神様を知り、後に幸せの中で神様を感じるようになります。今までと違う態度、やり方で、決断し実行できるようになっていきましょう。

(要約者:日名 洋)

(7月3日)